

第二期 第六十号 (三版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2021. 07. 20 定有堂書店 発行

何度でもやり直す

翻訳まで

失われた本をもとめて

汽水のほとりから (4)

郭沫若の書が伝えるもの

穴アケ日記

「深い学び」をめぐる VI

かかしになった子供達

小川軒と市勘の思い出 下

八代日記 (十六)

存在しない本のこと

鳥取あれこれ その五十九

不条理のメルヒェン III

いま私が恋しいもの

きゆうり

猫と断捨離

奈良 敏行

宮川 敬之

三砂 慶明

小原 修治

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

松田 裕史

芝野 浩貴

古賀 啓三

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

武中 淳彦

三浦 永理

あきの素生

ドフメリア

## 何度でもやり直す

奈良 敏行

(定有堂 店主)

六月下旬、久しぶりにJRに乗って、県中部へ出かけた。穴蔵から顔を覗かせたような気分の高まりで、書店組合の総会に出席した。クルマだと、玄関から七十分くらい距離だが、各駅停車で九十分かけての移動を選んだ。スローな時間を過ごしたかったからだ。

書店を含めいろんなことが、時間に追い越されたという気がする。いつも数歩先に意識を構え、現実の時間は数歩後ろに流れていた。その時間と意識が、同期してきたような感覚だ。停滞は性に合わないもので、逆向きに歩くのはどうだろうと思いはじめている。時間を逆向きに追い越すというのはどうだろう。それが何度でもやり直すということだ。

最近「定有堂の推し本」というカードを、いくつかの本に添えるようになった。いままでは、読者の前を歩くのはいけないことと、自分に言い聞かせてきた。でもこのところ読者の人と対話していると、読者は「思いがけないもの

だがじつは求めていたもの」との出合いを求めている、だから「推し」てもいいのだと気づきはじめた。でもやはり前を歩くのではなく、時間を逆に巻き戻すという方向で考える。

例えばその一つに、山内志朗『目的なき人生を生きる』がある。目的がいらなんなんて思いがけない主張だ。しかしじつは、目的をリセットするという内容で、自分が求めている世界だと気づく。スコラ哲学の本なのだ。「欲望は原初形態において対象を持たない」、という話の核が、気に入っている。対象をリセットする。つまりやり直しの話だ。欲望自体は、生きるエネルギーなので変化しないが、その対象は変化する。対象において欲望は実現するので、欲望が満たされないのであれば、対象をリセットすべきだ。何度でも欲望の現在を確認して、やり直す必要がある。いまは追いつくそうと接近する時間を無視して、スローに呼吸し、後ろ向きに歩み、もう一度欲望の初発へとたどり直すのも、いいなと考える。

直取り集団トランスビューと取引する本屋には、分厚いカラーの新刊案内が送られる。フロクに、石橋毅史さんのレポート「本屋な日々」が添えられ、愛読している。コロナ禍と時を同じくして一年余の休載がつづいた。それはわ

たしにとつては事件だった。一番聞きたいときに、石橋さんの声が聞けない。ここにも時間に追いつ越された風景を感じた。さいわい五月から復活した。復活やり直しの嚆矢は「あなたへ伝えたい本」という切り口だった。いままでのように「伝えたい本屋」ではなく「伝えたい本」。対象が、欲望の源流にリセットされた、と解釈した。一年余の空白が「欲望」の原初形態を見いだしたようだ。橋川幸夫『21世紀企画書 日本のインターネットの可能性』が紹介されていた。2000年刊行の本だ。急ぎ古書で取り寄せる。二日で読み終えた。新世界が登場しても、人は自分の文脈を手放さないと理解した。石橋さんは、「あの頃の自分が再び頭をもたげると締めくくっている。思えばその年に、定有堂は手づくりでHPを立ち上げた。日々興奮のるつぼだった。

著者の橋川さんの結論は、「インターネットの最終形態は個人の電話機がサーバーになる」、ということのようだ。この身の丈のサーバー（砦）と向う岸のネット世界の間にあって、中抜きが加速するほど、間を取りもつ存在が必要となる。それがメデイウムで、人もメデイウムの一つとなる可能性をもつ。わたしは「一人メディア」の時代がやってくると思える。中間にあるメデイウムが、自分の欲望の対象だと、初期設定を明確にする。

本屋は「商い」という表象において、メディアウム（メディア）の一つなのだ。そこには「商いの筋」があり、「人を集める」ということはどういうことなのか「人の生活に入っていく」とはどういうことなのか」と、この企画書は強く問いかける。大きなメディアが力を失いつつある今日、小さなメディアからのやり直しが始まる。本屋は小さな一つのメディアだ。著者のもう一つの結論は、人と人をつなげる最大のメディアは、「意識の根底にある悲しみ」に触れるものだと言っている。人のこころに寄り添うのが、商いの筋という意味だろうか。

世が移ろいそして果てに残るのは欲望の原初形態だ。ここから何度でもやり直せる。やり直すうちに、目的は他でもない、自分の根底に向かつて歩んでいただけだと気がつく。

2021.06.24

(参考)

石橋毅史「本屋な日々」トランスビュー新刊案内折り込み連載

石橋毅史『本屋な日々 青春篇』トランスビュー 2018

山内志朗『目的なき人生を生きる』 角川新書 2018

橘川幸夫『21世紀企画書 日本型インターネットの可能性』

晶文社 2000

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

次ページ「案内 編集部記

今回お願いいたしました。宮川敬之さんにご寄稿いただきました。鳥取市の天徳寺のご住職です。講談社学術文庫に『和辻哲郎―人格から問柄へ―』という「著書もある東洋哲学の学者です。今年の秋に春秋社より『「現成公按」を現成する』という「本を刊行されます。原稿はすでに一月に脱稿されていますが、その心境をお書きいただきました。また、二〇一九年七月より春秋社HPにて「坐禅とは何か―『正法眼蔵』『坐禪箴』を身読する」というタイトルで藤田一照・宮川敬之、交互連載が継続しています。

# 翻訳まで

宮川 敬之

(天徳寺住職)

鳥取のお寺に生まれて、久松山の麓にある学校に、幼稚園、小・中・高校と、あわせて十四年間も通った。半ば無意識下で受けた強制によって、半ばは自主的な選択のつもりで、生家の宗派の僧侶になった。学生時代に母が亡くなり、約十年前に師匠である父が亡くなって、お寺を継いで住職となった。お寺は鳥取大火で焼けてから完全な復興が出来ていなかった。だから復興が責務だった。お檀家さんと協議を重ね、幸いに私の代に建物部分の八割の復興を遂げた。二〇一六年の秋のことだ。復興できて天にもものぼるほどうれしさが湧きあがるかと思いきや、このときに私はただ茫然とし、混乱していた。復興事業は、物心つく頃から(正確には生まれる前から)営々と続けられていたもので、それで私は、自分の生あるあいだこの事業がずっと続くものと、心と体の奥底で固く思い込んでいたらしかった。つまり私は、復興事業に完全に依存していたのである。その依存が(八割の完成であっても)外される現実になって

茫然とし、混乱してしまつたのだつた。私はそのときより復興を第一に考える住職から、別の生き方を探すよう転換を余儀なくされたのである。

どのように生きるか。僧侶をやめるつもりはない。お檀家さんとお寺を守っていくことはこれまでと変わらない。だがそのうえで、私になるべき僧侶とはなにか。うちの宗派は曹洞宗で、その祖である道元禅師の名著『正法眼蔵(しょうぼうげんぞう)』は世に難解をもって鳴る。この本に真正面から取り組んでみようか。小さい頃から本屋に入り浸り、駅前の旧富士書店二階の岩波文庫の棚前と、定有堂書店の思想書の棚前に行くことが、高校卒業までの生きがいのほとんどすべてだった。やはり本が読みたい。うちのお寺には坐禅堂もある。坐禅ができる。ならば坐禅をして『正法眼蔵』を読み解く僧侶になろう。そう思った。そこで何回か、有志の方々の前で『正法眼蔵』の講義を行ってみた。見かけは取り繕ったが、やりながら正直のところ、まるで歯が立たないと思っていた。誰かの二番煎じの解説を、ただ口から垂れ流しているようにしか思えなかった。この本を現代に読むことについて、自分で納得できる、地に足が着いた説明ができていない。蒼ざめた。坐禅の修行を根底にして、学問的蓄積も参照しながら、自分の問題として根本から考え、わかりやすく語る。そんな説明が

なぜできないのか。できないならそうした解説をまず探し、勉強すべきだろう。探索の末、見つけた！だがそれは日本語の本ではなかった。日本人僧侶が英語で書いた『正法眼蔵』「現成公按」巻の解説本だったのである。

それは『Realizing Genjokan (現成公按の実現)』という本だった。著者は奥村正博(おくむらしょうはく)という人で、一九七〇年代、二十代の時にアメリカにわたり、以来五十年にわたって欧米人とともに修行しながら、道元禅師の著書の翻訳・解説に尽力されてこられた方である。仏教を知らない欧米人へ説くことを前提にしているので、坐禅の実践に基づき、根本的な知識の説明から、驚くほど明快な解説がなされている。とはいえ英語である。だけれか日本語に訳してくれないだろうかと思った。同時に、奥村師が住むアメリカ三心寺(さんしんじ) 老師が開かれたお寺)に行き、勉強・修行のやり直しをさせてもらいたいと願った。後者の希望は二〇一八年にかない、友人三人とともにブルーミントンの三心寺で連続講義を聴講できた。朝五時から五十分の坐禅を一日に七回、その間九十分の英語の講義を午前午後二回。それを五日間。へとへとになったが、僧侶の資格を作り直してもらった気がした。何よりも七十歳を超えた奥村師が、この修行を参加者(我々四名の日本人僧以外、欧米人の僧俗三十人)と孜々と行じておら

れる姿は圧倒的だった。五日間の聴講のあと、私は自分に翻訳をさせてほしいと奥村師に願い出ていた。できないでは、もはやなかった。修行として行うのだ。その場で奥村師より承諾を受けて、本一冊の翻訳が始まった。

本格的な翻訳は初めてだったし、力不足と日常のいろいろを言い訳にして、一年たつても三分の一も翻訳できなかった。このままではいけないと思っていた矢先、思いがけない事態が出来た。新型コロナウイルスのパンデミックである。お寺の活動のほとんどが中止となり、緊急事態宣言のさなか、私は改めて、すぎるように朝晩翻訳を続けた。この本には、奥村師の人生が刻まれていて、そのお声に一日中浸ることができるのはなよりの救いとなった。十年以上前に出版された本であるのに、驚くべきことに今回のコロナ禍の世界の混乱と衝突までが予見されているようで、それを道元禅師の一文一文と正確に連動させて読み解かれている。予言の書を読み進めるかのように、私は半ばとてり憑かれるように翻訳していた。今年一月に脱稿し、奥村師の大幅な加筆訂正を頂いて、今年の秋には春秋社より出版するはこびとなった。題名を『「現成公按」を現成する』という。混乱と衝突の現代に道元禅師の仏教を実践するとはどういうことかを、これほどまでに切実にわかりやすく書いてくれている本を、管見にして私は知らない。

# 失われた本をもとめて

吉田健一『友と書物と』みすず書房

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

告白すると、私は漫画が大好きです。小学校2年生ごろから今に至るまで、麻葉のように読み続けています。一冊6分程度で読み終わるので、長時間楽しむことができないのが残念ですが、漫画喫茶やTUTAYAのコミックレンタルという仕組みができて、心から嬉しく思いました。しかし、いい年になっても漫画を読み続けているのが恥ずかしくて、誰にも言わないようにしていました。

でも、吉田暁子の『父吉田健一』を読んで、目の前に光がさしこんできました。

「父の生活は単純だった。多くのことを切り捨てたのだろう。(中略)一日の大半を書斎で過ごししていたが、そこでは仕事の他に読みたい本を読み、『少年サンデー』、『少年マガジン』を読み」とあるではないですか！あの吉田健一が漫画をずっと読んでいたのか。軽薄ですが、もう大

丈夫だと思えました。

途端に、何度も挫折していた吉田健一の本も、同志の本だと思つて、読む気力が湧いてきました。吉田健一の文章には句読点が少なく、読みにくいと思つていたのですが、吹き出しだと思えば、何のことはない。ぐいぐいと読み進められるようになりました。

圧巻は、清水徹が編集した『友と書物と』です。この本がすごいのは、まず清水のあとがきの一行です。

「たぶん吉田健一は「青春」という言葉を使ったことがない。」

この世でもっとも困難なのは、そのもの自身の存在を証明するよりも、存在しないことの証明です。この一行が本当かどうかよりも、重要なのは、編者の清水徹がそこまで書けるまで、吉田健一の文章に惚れ込んで読み倒したことにあります。この人がセレクトした吉田健一の選集が面白いはずがない。全32冊の著作集の中から、読書好きが読むと、それだけでもだえてしまいそうな文章がカラージュ風に配置されています。

たとえば「本のこと」には、

「我々を楽ませしてくれるやうな本は一度でその楽みが終るものではない。ただそれだけの目的で書かれたものは

別であるが、本と呼んで差し支へないものは何度でも繰り返して読めて、さうすることが我々が生きてゐることに味を加へ、それが本を読む楽しみといふもので、本をさうして読んでゐるうちには当然、我々が使ひ馴れた箸や鉢とともに本もただの道具ではなくなる。」

とあつて、読書に贅沢な時間を注ぎ込んだ吉田健一が、読書とは何かを考えるにあつて、まずその外側である本から考察をはじめ、ゆつくりとまるで驢馬とともに歩むように、読書をめぐる旅へと連れ出してくれます。私はいきなり『時間』から読みはじめて挫折したので、もし同じくつまづいてしまった人があれば、もう一度、この本を手にとつてみてください。

吉田暁子によると、第二次世界大戦に応召されて死を覚悟した吉田健一は、妻に子供たちについての遺言を残していたそうです。

「アンデルセンで育ててね」と。イソップに多く語られている人間の残酷な現実でなく、悲しくとも救いのあるアンデルセンを読んで育つた子は、逆境にあつても救いを信じ、救いを求め、時には救いをもたらすだろう。こわいものはないが悲しい事はあることを納得するだろう。本當に

強いものは優しいとも、父は言っていた。」

以来、私はイソップから脱退し、アンデルセン派を標榜しています。

## 汽水のほとりから (4)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

「放送禁止用語」は存在しない。それは放送局側の自主規制によるもので、法的規制があるわけではない。同様に「放送禁止歌」も存在しない。かつて森達也がこれを主題にテレビドキュメンタリーを制作したが、取材を進めるといづれも自主規制に過ぎず、タブーを生み出していたのは我々自身だったとしている。番組の内容は、『放送禁止歌』（解放出版社、後に光文社文庫）となり、翌年出版された。ところで、そこで取り上げられた歌の一つに、高田渡の「自衛隊に入ろう」がある。高田は60年代のアメリカで起きたフォーク・リバイバル・ムーブメントの影響を強く受けた人で、その本質がプロテスト（抵抗）にあることを深く理解していた。フォークソングとは民衆の唄であるとともにプロテストソングである。しかも彼はそれが日本にも存在したことを添田唾蟬坊の「演歌」の中に発見し、それを復活させるべく、その言い回しをフォークの曲に乗せ

て歌うことを思いつく。「自衛隊に入ろう」の原曲も、ピート・シーガーが自国の軍隊を風刺する反戦歌だった。高田渡はそこに自衛隊を揶揄する自作の歌詞を乗せ、皮肉たっぷりに「入ろう」と歌った。歌はたちまち評判となる。

本人は不本意かもしれないが、彼の名が残るとすれば、この歌ゆえと思う。披露した際、彼は時代の寵児だったし、それは未だに戦争の記憶が生々しく残る戦後という長い時代を象徴する風景だった。若者たちは反体制だったが、反世間的だったわけではない。この歌を受けた背景には、自衛隊が世間から支持されていないという現実もあった。

この歌が発表された一九六九年は私が生まれた年だが、それから更に二十年以上を経た90年代初頭においてなお自衛隊に対する世間の風あたりは厳しかったと、防衛大学を卒業した高校の同級生が打ち明けてくれたことがある。基地周辺の住民には石を投げつけられることもあったという。そんな経験から彼は仕事にやりがいを感じられず、幹部候補への道が保証されていたのに遂にやめてしまう。

自衛隊に対する国民感情は長らく複雑だった。その前身の警察予備隊は、朝鮮戦争勃発を契機としてGHQの指令に基づいて組織され、国民の内発的動機から発足したものではなかった。軍隊かどうか曖昧な存在だった。国民は知らないあいだに軍隊を持たされていたのである。以来、

日本人は自国の軍隊について腰を据えて国民的な議論をしてこなかったように見える。賛成反対は平行線のまま、「自衛隊に入ろう」のような火種の可能性も自粛された。

一方、建国当初から自国の軍隊のあり方の是非について論じ合ったアメリカのような国もある。内田樹によれば、合衆国憲法第8条第12項には「陸軍を召集し、支援する権限を有する」ことが記されているが、続けて「ただし、このための歳出は二年を超えてはならない」と明記され、陸軍は召集できても常備できない仕組みになっているという。これは当時建国に立ち上がった人々が政府の私兵と化した陸軍から銃口を向けられるという経験をしていたからで、有事には民兵を募るとした。（集英社新書編集部・編『「自由」の危機』所収「アメリカにおける自由と統制」）。

自国の軍隊が場合によっては危険な存在となることは、中国の天安門事件や韓国の光州事件を挙げるまでもなく、国民が肝に銘ずべき教訓である。だから建国時のアメリカでは自国の軍隊について考えるに際し、職業軍人と民兵を天秤にかけ、よりリスクの少ない方を選択したのである。翻って日本の場合はどうか。自国の軍隊を頼る以外にほぼ選択肢が無い。確かに、当時のアメリカでこうした選択が可能だったのは、独立戦争の勝利による建国という歴史的背景があった。銃規制が進まない要因であっても、人民の

武装権を記す合衆国憲法修正第2条が今もなお残るのは、同様の経緯である。そもそも独立宣言は武装権のみならず人民の抵抗権・革命権をも認めている。一方、日本では、それらは権利どころか、論ずることさえ憚られる反社会的な行為であった。我が国でデモが少ないのも当然である。

実は先の同級生の話には続きがある。除隊して数年後の一九九五年に阪神淡路大震災が起きた。被災地域における救命活動で自衛隊が俄かに世間の脚光を浴びるのを見て、やめないでなければよかったと彼は思ったというのである。私はこの頃から長かった戦後が終わり始めたかと思えている。

以前にも書いたが、ヤクザと左翼は共に80年代半ば頃には大衆の支持を失っていた。戦後の民主主義体制の下、自前の武装権・抵抗権・革命権を夢見た人々の群れ。が、彼らに対する世間の認識は義挙から暴挙へ変化していく。決定的だったのは、80年代末から90年代半ばにかけてのオウム真理教事件だろう。入れ替わるように、存在意義を増したのが自衛隊だった。それは戦争の記憶の風化とともに日本が再び戦争できる国になる道へ進む第一歩だった。

## 郭沫若の書が伝えるもの

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

久しぶりにNHK—BSで映画「ラストエンペラー」(1987年、ベルナルト・ベルトリツチ監督)を観た。

坂本龍一の起用、紫禁城の全面ロケなど、いろいろ話題の多かった作品だが、封切りの際、私の心に強く残ったのは、主人公の溥儀(大清帝国最後の皇帝にして、日本が樹立した満州帝国の初代皇帝)に対する、当時の中華人民共和国(中国共産党)の再教育だった。

◇ ◇ ◇  
溥儀は戦犯施設に収監されたが、そうは言っても元皇帝。彼にはお付きの世話役がいて、靴の紐まで結んでくれる。党幹部の刑務所長は静かに「あなたが自分でやりなさい」と告げる。それが再教育の第一歩だった。

皇帝とは、実は自分では何もできない、「自立していない人間」でしかなかった。当時の中国共産党は洗脳教育や

苦役刑などは行わず、彼を人間として丁寧扱い、市民としての自立を促す。

溥儀はその通り釈放後、一介の市民—庭師として静かな余生を送るが、やがて中国は「文化大革命」の渦中にのみ込まれ、老いた溥儀が刑務所長に再会したのは、彼が街頭で紅衛兵によって「反革命分子」として引き回されている最中だった。「何かの間違いでは。彼はいい教師です」。溥儀が、まだ子供のような紅衛兵たちに懸命に訴える姿が痛々しい。

◇ ◇ ◇  
絶対的権力(清)は絶対に腐敗するが、革命さえその例外ではない。天安門事件で民主派学生を殺した軍隊が「人民解放軍」と名乗るのは、何という歴史の皮肉だろう。

◇ ◇ ◇  
岡山の私の実家になぜか郭沫若(中国全人代副委員長で文学者、歴史学者)の書があった。どういう経緯でわが家に来たのか、亡くなった父には聞かずじまいだったが、戦前、郭沫若は岡山の旧制六高に学び、日本の女性と結婚して、私の中学の近くに新居を構えている。

郭は私が生まれる2年前(1955年)、戦後初の中国学術文化視察団を率いて37年ぶりに岡山を訪れたが(後樂園に彼の詩碑がある)、その時、父親がもらったものだろうか。新聞記者をしていた父は、郭と同じ六高の卒

業生。それとも郭や周恩来と親交があり、日中友好に奔走した岡山県出身の実業家、岡崎嘉平太に「貧乏だった東京の県学生寮でさんさん世話になった」と話していたから、何か使い走りのようなことをしたのか、それは分からない。

◇ ◇ ◇  
郭沫若に限らず、中国の現代史に出てくる人間のほとんどは日本に深く関係している。

中国、台湾の双方から「建国の父」と呼ばれる孫文は、宮崎滔天や頭山滿らアジア主義を唱える右翼の支援で日本に亡命、住居を世話したのは後に首相になる犬養毅（木堂）で、彼は五・一五事件の凶弾に倒れるまで「孫文との縁で日中衝突は収束できる」と信じていた。一方、蒋介石は元日本陸軍の士官候補生。「日本と中国は同胞」が持論の頭山は、朝日新聞社長の緒方竹虎を介して蒋介石に和平工作を続けたが、かなわなかった。

◇ ◇ ◇  
「中国文学の父」魯迅は仙台で学び（小説「藤野先生」）、周恩来は明治大学卒。毛沢東と共産党を結成した陳公博は日本の傀儡・南京政府の主席に寝返り、戦後、日本に逃亡、羽合温泉「望湖楼」に一時身を寄せた。明治から昭和に至るまで、右から左まで、みんな日本と関わっている。

◇ ◇ ◇  
習近平の強権政治もあって、今や見る影もない日中関係

だが、こじらせた元凶は中国を「支那」の蔑称で呼び続けた石原慎太郎元東京都知事だと、ずっと思っている。

◇ ◇ ◇  
国交正常化の際、周恩来と田中角栄は「領土問題（尖閣諸島）は子供たちへ将来の国民に任せよう」と棚上げした（野中広務証言）、ところが石原は「都で尖閣諸島を買う」と言い出し、中国各地で反日運動が燃え上がった。石原は直後「支那は海軍力がないから、少しも怖くない」などと発言している。今となってはただのバカである（浅はかな東京五輪誘致もしかり）。

◇ ◇ ◇  
尖閣諸島の緊張で、中国軍機と自衛隊機のニアミスが相次いだ2014年、地元で日中友好協会の式典があった。中国大阪総領事館の若い副総領事は「いつニアミスが有事になるか、不安に感じている」と切り出し、「政治家は問題を作るのではなく、解決するのが仕事」と日中双方の指導者への苦言とも取れる挨拶をしたのには驚いた。

率直で誠実だが、はたして中国の外交官として大丈夫だろうか。心配しながら式典後、「私も全く同じ考えです」と筆談で伝えると、彼はにっこり笑って、私のノートに何か走り書きした。

それは、わが家にある郭沫若の書と同じ、「一衣帯水」という言葉だった。彼は今も健在だろうか。

# 六アケ日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

朝、保育園に行こうと家を出るとお隣の枝切りが始まっていた。長い枝切りハサミを触りたいと騒ぐ二歳児。「ここを握るでしょ。ほらチョキン！」と教えてもらってうれしそう。葉っぱの真ん中や枝の先っちょだけが切れてパラパラと落ちてくる。向こうから近所のおばあちゃんがやってきた。「自分の子どもやったらイライラしてしまうけど他人の子どもやったらあんなしてゆっくり相手できるわなあ」と言う。「私も若い時は無茶苦茶言うてたわ子供には」そうですねえ、つい怒っちゃいますからねえ、と適当に相槌を打っているとおばあちゃんは驚いたように「そうなん。あなたも人間やったんやな」と言う。なんやと思ってたんや。ここは宇宙人がやってる本屋か。

「アナキズムについて考えなさい」と言う宿題が出た。

アナキズム。ネットで調べると「無政府主義者」とか「国家は死滅すべきもの」とかなかなか大変そうだ。政府とか国家のことはわからない。近所にないし。あるのは生活だ。本当にリアリティがあるのはいま隣にいる人の声だ。それが知っている人でも知らない人でも。

いつの間にか店内に座っていた男性が突然「ここに前住んでたんですよ」と言い出した。え、Oさんですか、と言うと「そうです」とうなづく。シモヤケができるから引越したと言うOさんですか、と言うと「高木さんでしょそれ言ってたの」と笑う。「ネットで見てこの家やんって思ってきました」と懐かしそうに天井を見上げる。「この壁とかね、塗り直そうかなと思っただけですけどね」ああ、ポロポロ砂が落ちてきますよね、とささやかな悩みを共有する時間。脱衣所と台所は床を直しました、大家さんは元気ですか、お向かいのおばあさんは相変わらずですか、とかいう他の誰にもわからない会話が心地よい。

みんなに伝わる大きな声よりも、ここでしか発生しない小さな声。当人同士にしかわからないことは、当人同士にわかればいいのだ、と思う。世の中にはわかりやすいことが多すぎる。わからないことはわからないし、人が入っ

て行ける場所は限られている。

「佐々木酒造のところだね、おばあさんに道を聞いたの、そしたら遠くもないけどちゃんと説明できないからこの道をまっすぐいって、その辺で誰かに聞いてみてって言われたの」と汗を拭きながらおばあさんが話し出した。佐々木酒造からここまでではふたつめの交差点を左に曲がるだけで着く。大半の人にとってはややこしくない道のりだがおばあさんにはむづかしかった。「それでね、誰かに聞こうと思つてキヨロキヨロしてたら本の看板が見えてね、たどり着いたのよ。ここはわかりにくいわねえ」。誰にも聞かずにたどり着いたくせにわかりにくいとはどう言うことだろうか。住宅街の真ん中に突然店があつたらそれがどんな店でもまあわかりにくいだろうなと思う。家の並びの中に穴を開けたみたくないスポット。

Spot には小さな領域とか、しみ、ニキビと言った意味もあるらしい。生活の中に空いた小さな穴。大きくもなく小さくもなく、穴であり続けるように。ふと立ち止まって覗くと奥から涼しい風が吹いてくるかもしれない。

あなたは何主義者ですか、と聞かれたら穴あけ主義、ア

ナアケズムです、と答えることにして例の宿題からは逃げようと思う。逃げるためにも穴があると便利だ。

# 「深い学び」をめぐる VI

松田 裕史

(高校教員)

二十四節気の中の芒種は穂の出る植物の種を蒔く時期であるが、僕の中で芒種は次年度の教科書を決める時期だというイメージが強い。基本的には毎年のように使用教科書を変えるわけではないので例年はそれほど選択に苦慮しない。しかし、今年は違う。高校では来年度から新学習指導要領が実施されるのに合わせて教科書も装い新たにフルモデルチェンジする。これまで使用していた教科書をそのまま使用というわけにはいかないのが、各出版社の新教科書をじっくり眺めることとなる。

教科書は学習指導要領に基づいて作成されているので、指導要領を読んでおくとそれぞれの教科書の意図がより深くわかる。英語で言えば高校の指導要領はたかだか百数十ページではあるものの、決して読みやすい、読みたくなくなる文体ではないし日本語として破綻している箇所もあり、一気に読むのには不向きかもしれない。しかし、後半は同じことの繰り返しになるので飛ばし読みできる。今回は科目

名が「コミュニケーション英語」から「英語コミュニケーション ション」へ、「英語表現」が「論理・表現」に変わった。だが、コミュニケーションには当然、表現は伴うし、文章の理解や表現には論理も必要だ。その意味でも英語の指導内容を二つに分けている前提にこそ僕は疑義を呈する。二つに分ける必要はない。その証拠に、新学習指導要領のなかの「英語コミュニケーション」と「論理・表現」のそれぞれの目標は酷似している。あまりにも似ているので読んでいてデジャブかと思ったが、分ける必要がないことを指導要領そのものが露呈している(例えば、「英語コミュニケーション」における「書く」ことの目標と「論理・表現」における「書く」ことの目標は次のように全く同じ文言である。「日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようになる。」)。

また、新指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が謳われており、深い学びのキーとして各教科の「見方・考え方」を働かせることが重要とされている。数学や物理、歴史において教科特有の「見方・考え方」を働かせるという発想は理解できるが、英語を同じ土俵に乗せるのは

高校レベルではかなり無理がある(大学レベルでは可能だろう)。文科省も苦肉の策で「外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに注目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と記しているが、理念としては脆弱すぎる。そのアンチテーゼとしても昨年書いたのが、「高校英語における『深い学び』の実践」(『ディープ・アクティブラーニングを基軸とした4技能5領域時代の言語活動を構想／実践する』)だった。

さて、教科書選定だが「英語コミュニケーション」と「論理・表現I」、それぞれ十冊ほど目を通した。漠然と眺めていてもどれがよいか決まらないので、難易度、構成、英文の分量、レイアウトなどの観点から自分なりに評価していく。これに加えて僕が重要視しているのは著作者である。特に、著作者一覧の最上部に名前が来るメインの著者は気になる。基本的には大学の研究者が名を連ねているのだが、小説と同じで誰が書いているのかも判断に大きく影響する。名もない研究者より、すでに著作が複数あり、評価が確立されている研究者の教科書を使いたくなるのが世の常だ。出版社もそれが分かっているのだろう。各出版社の著作者をみるとビッグネームがずらりと並んでいる。そ

これらの研究者がどういう研究をやっているのか、どんな言語観、研究観を持つているかは大体理解しているつもりなので、その知識をもとに教科書を分析してみる。すると、教科書は見事にその研究者の考えが反映されたものだとわかる。リーディング研究の専門家であればリーディングの部分が手厚い内容となっているし、第二言語習得理論の専門家が手掛けたものはなるほど、習得の順序が極めて理に適っている構成となっている。しかし、理論的な視点で優れているからと言ってその教科書を採用するとは限らない。例えば、ある教科書は一つのレッスンで十以上の活動が細かく設定されていた。活動のそれぞれのつながりもあり言語習得上、理想的な流れで表現活動ができるように構成されていた。この教科書はおそらく多くの学校で採択されるだろう。著作者も研究者のトップランナーで名も知られている。しかし、僕の中では一推しにならなかった。構成が精緻／精妙すぎて授業をするのに余白がない。車のハンドルで言えばあそびがない状態だ。個人で学習するにはよいだろうが、何十人も生徒に取り組ませるには無理があると判断した。また、言語習得の流れと授業論は違う。それを混同すると授業がうまくいかない。その点、広島県公立中学校に勤務されている胡子先生の授業構成はすこぶ綿密に、重厚に考え抜かれている。

# かかしになった子供達

↓道の駅はなぜそこに↓

芝野 浩貴

(地球探作家)

アップリンク渋谷が閉館した。コロナ不況だけが原因ではないが、行きつけのミニシアターだったこともあり残念である。自力ではアクセスできない映像から多くの視点を学ぶことができて感謝している。最近の記憶では、『ナイトクルージング』が印象的であった。豪華客船の話でなくて、先天的全盲の監督がどう映画を撮っていくのかというドキュメンタリーで、「見えない人が見るとはどういうことか?」ということに

手作りセット・アニメ・実写・CGの4分野の専門家と話し合いながら挑戦していた。特に指で色を確認している場面で、いかに自分が目や耳の機能を限定しているのか再確認した。

映画、『ノマドランド』が話題になっている。ノンフィクションであるが、ストーリーだけでなく、出演者も役者でなく本物の「ノマド」の人である。アカデミー賞の受賞に

関しては、審査員の人種構成にも寄るので、価値の重きを置いてないが、『パラサイト半地下の家族(韓国)』やケンローチ監督の『家族を想うとき』(英国)など国を問わずに「経済というタイタニックは沈んだ」(ノマドランドの台詞より)ことを伝える映画を通して日常を振り返りたい。舞台はアメリカ。

自然光で撮影しており、広大な荒野が背景なのでスクリーンの中に身を委ねると、コロナ鬱から逃れることができ、リフレッシュできたという感想を持つ人もいるだろう。ワーキャンパーという60代70代の高齢者労働の話であるので、

将来的な不安を覚える人もあるだろう。(多くはアマゾンの倉庫で働いている)キャンピングカーで移動するという生活スタイルなので、「ああならなくてよかった、家があつて良かった」とホツとする人もあるだろう。ヒロインは「何故、ホームレスなの?」と聞かれて、「ホームレスでなくて、ハウスレスよ」と答えるが、私の感想はこれに近い。いや、感想というものはない。なぜなら、私自身がノマドだからである。ヘンリー・ソローのように小屋を自力で作ったわけでも、カヌーで移動しているわけでもない。固定化された特別な家をホームと呼んでいるわけではなく、教員時代は「学校が家である」と言い放ち生徒の

中に埋まり、部活遠征時代や現在は「車が家である」として移動しているので固定的なハウスはない。「地球は庭である」と30年前に生徒に話した時は笑われたが、現在もその感覚を持ち探究しているのでホームレスではない。そこに行つた時に、そこがホームとなる。だからこそ、「800円」だとか、「不要不急の外出は避けるように！」など掛け声だけの言葉には上級国民のエゴを感じる。どれだけ倒産や自死者が多いのか自分の目で見たことがあるのかと。その前に、税金から給料もらつてる人が率先して命を懸けて国民を守ってもらいたい。「そんなに移動してて感染しませんか？」とも聞かれる。何を言っているのだろう。コロナ初期対応に遅れた今は、感染可能性の中にじつとしている方が感染確率は高い。ウイルスのいない所へ移動しているのである。差別がいいか悪いかは別にして、差別をするのは大抵固定化している側からで、移民国家のアメリカと違い、とりわけ日本ではノマドは元々「よそ者、馬鹿者」として分断される立場にあり、分断される側だからウイルスの気持ちがわかる。左の①②は、ウイルスがどう日本列島に影響を及ぼしているのかを探るために同時多発的に移動した5月の私の移動経路である。( )内は滞在した道の駅名

ノマド①

岩美、豊岡、〈城崎温泉〉「コウノトリ研究」、舞鶴「港湾研究」、(若狭おばま)、「原発・産業廃棄物研究」、敦賀、鯖江、福井、〈片山津温泉〉「加賀温泉考」、小松、金沢「若者生態観察」、輪島「北前船・塩田研究」、(すず塩田村)、七尾、〈和倉温泉〉、氷見、(雨晴海岸)「立山共景」、高岡、富山「白海老研究」、魚津「蜃気楼」、糸魚川「翡翠研究」、白馬「フォッサマグナ・塩の道」、松本、木曾「中山道再考」、(大桑、下呂、長浜、(若狭熊川宿)「鯖街道」、出石、〈城崎温泉〉

ノマド②

(あらエッサ)、松江、出雲、〈温泉津温泉〉、江津、〈有福温泉〉「火山と鉄研究」、益田、(願成就温泉、〈湯田温泉〉、下関、小倉、太宰府、日田、湯布院、(ながゆ温泉)、延岡、(日向)、宮崎、都城、(えびの)「ミヤマクリシマ」〈人吉温泉〉、(子守唄の里五木)、(宮地岳かしの里・小学校跡地)、天草「崎津集落クリシタン研究」、〈下田温泉〉、阿蘇山「熊本復興の経過観察」、〈黒川温泉〉、(おおむた)、〈武雄温泉〉、諫早「開門問題」、雲仙岳「噴火30年追悼登山」、〈雲仙温泉〉、(彼岸の荘、佐世保、「九十九島の奇跡」、(昆虫の里たびら)、平戸「ザビエルの軌跡」、唐津、(宗像)、〈川棚温泉〉、(きららあじす)、山口、(萩往還)、(ゆうひパーク浜田)、江津、(キララ多岐)、〈湯の川温泉〉

# 小川軒と市勘の思い出 下

古賀 啓三

(米国ミシガン州隠棲)

市勘の話である。

開店早々から隆盛で、と書いたが、二〇〇六年から三年間、名古屋本社勤務となった際、隆盛だった頃から三十年後くらいであろうか、機会を作って顔を出すと、こちらも大将が覚えていてくれ、嬉しかった。

しかし、左側のカウンターは使用されておらず、灯も点されず薄暗い。

右のカウンターも大将と若い職人の二人だけで、客も中年の酔っ払いの二人連れがグダを巻いている、とかなり零落した、落ちぶれた感じであった。

その暫く前、まだ本社勤務も決まらぬ頃、アメリカの家でソフィア・コッポラ監督の“Lost in Translation”という映画をレンタル・ビデオで観ていると、鮎屋のシーンで市勘の大将が映っていて驚く。

興奮し、ビデオのフレームを止め、結婚する前、市勘に連れて行く

たこともある家内に、これ市勘の見市さんだろう、間違いないよな、と同意を求めるも、やや欠陥的に顔識別能力の低い女は、人違いじゃないの、と水を差す。

興奮したまま日本の父に電話し、ことの次第を告げると、早速市勘に連絡し(こういうミーハー的というか、慌て者的なところは父譲りなんである)本人と確認したところ間違いなかった。

何十年振りかでお目に掛かった際、まずそのことを話題にすると、ソフィアさんが市勘を気に入っていて、日本に来ると必ず顔を出す、という縁で、一日貸し切りで撮影することに合意したが、三十万だかなんだかしか貰えず、結局損した、と笑っている。

映画の中の店は何か薄汚れた感じで、記憶の店とは異なり、セツトだと思っていたのだが、映画は冷酷に店の凋落を写し撮っていたのだ。

因みにこの映画自体は面白く、お薦めする。

ソフィア・コッポラが自分で探して通う訳がなく、きつと誰か映画関係者が連れて来たのだろう。

この店でも芸能人をよく見掛けた。

団十郎、当時海老蔵もよく来ていた。

一度、隣り合った際、飲み物は、と尋ねられた歌舞伎役者は、二日酔いで今夜はお酒の顔も見たくない、あがり頂戴、しやりは大きめだね、と頼まれていたのを覚えている。

覚えなくて良いことだけ覚えている、というのは今でも変わらず

だが、こういう何気ない一言が人の心に何十年も残る、というのは何なんだろう。

大将はその息子、現海老蔵とも一緒に呑んだりするが、生意気な野郎ですよ、と仰っていた。

前田美波里さんもよく来られていた。

音楽評論家の今野雄二さん。こちらは今検索してみたら、二〇〇〇年、代官山のマンションで自殺、とあった。

市勤が閉まつたらしいよ、大将は亡くなつたんだって、などと風の噂で聞いていたが、一昨年だか調べてみると、昔の店からそう遠くない、猿楽町の鉢山交番の近くに「いちかん」と仮名に開いた店を開けられたらしい。

電話してこちらは昔代官山にあった、見市さんのお店でしょうか、などと遣り取りしていると、ご本人が出て来て、あ、古賀さんの息子さん、東京に来たら一度顔を出してよ、とお招きいただく。

去年だったか、帰国する際、東京経由にし、地下にあるこじんまりした店に寄ると、市川さんという、名に市が入っているところが大将と同じの若い職人が、大将は今夜は同窓会でご不在です、大将は五十年、一日も休んだことがなく、今日が初めてなんです、と云う。

そういう日に寄ってしまう私。

益体もないことを書き連ねたが、我々が未だ外に出て、いろいろなことをしていた時分のことを思い出したい、と思つた。

ふらつと外出し、人混みを掻き分け目当ての店に辿り着き、隣客と肩寄せ合つて呑み食いする。

そういう日がまた訪れるのだろうか。

つていうか、そういうことをもう普通に行っている人がいるから疫病が収束しないのかもしれない。

小説で比較的高級な料理屋のことを書く時、この二軒の店がイメージの元型となつている、と言いつつてもいいような気がする。

高級な料理屋、ざつかけない食堂、同行する相手、店の料理人、オーナー、給仕、住居、住居の立地、濡れ場、濡れ場の相手、友人、友人の教育程度、出身校、家族、家族構成、職業、等々を小説に書く際、あなたが超虚構の作品の書き手であつたとしても、やはり私体験に基づくそれぞれのイメージの元型、準拠枠があると思う。

「濡れ場の相方」の準拠枠詳細の記述は止めておけ、と常識の残滓が私に告げているが、「このこと」を書くとき、いつも「あの体験」に基づいてちやうだよな、というのを、思い付き次第、これからも書いてみたいと思う。

ある意味、自分の「抽斗」の整理でもある。

# 八代日記

(十六)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

六月某日

上田正樹と有山淳司のアルバム『ぼちぼちいこか』に「俺の借金全部でなんぼや」というこ機嫌な曲があるが、家で流していたら長男がいたく気に入ってしまい「なんぼやが聴きたい」と毎日言ってくる。「五千円負けてしもた」とか「千円借りた」とかサビの「俺の借金全部でなんぼや」とか楽しそうに歌っている。曲が2分ちよつとしかなく、何度もリクエストされるのでこの1週間で百回は聴いたと思う。

スリーコードの曲だから子どもものりになれるのだろうか。でもただのスリーコードじゃなくてギターのアレンジがすばらしすぎる。ラグタイムギターが弾けたらいいなあ。有山氏の教則CDに手が伸びそう…。しかし教則本の類を通して読めたことがないので、どうしよう。

youtube に「俺の借金全部でなんぼや」のライブ映像があったが、テンポがめっちゃ速い。この速いバージョンも気に入ったらしく「凄いいのなんぼやが聴きたい」と願ってくる。このバンドでの演奏も素晴らしい。

しかしYoutubeには広告で小遣い稼ぎたいですとの欲望が丸出しの、子ども向けの劣悪な映像がたくさん出てきてうんざりするのでできれば開きたくない。こういうのはレコンキスタというか、侵犯を阻止していかないといけないと思う。しかし私に劣悪とか優れているとかの価値判断がちゃんとできているのか、子どもが楽しそうに観ているのならばそれでもいいのでは？とかグチグチ悩んでしまう。でも悩むのも面倒なので基本的には開かないようにしている。時間が立つとさらにゲーム機やスマホを買い与えるか否かの問題に出くわすだろう。領土争いは続く。

六月某日

実家の廊下に積みっぱなしの本を整理するために、文庫専用の棚を買ってみた。組み立てて適当に文庫を詰めてみたが、あと2つは棚がないと足りないようだった。ひとまず詰めたものを著者ごとにでも並べてみようとして作業を始めた。コミック文庫から。水木しげるがやたら多

い。諸星大二郎、萩尾望都、手塚治虫、大島弓子、ますむらひろし、杉浦日向子などが次いでいる。古い！と思われる内容なのかな。私の基本図書という感じだ。積んでいるときには思わなかったが、整頓してみるとシリーズできちんと揃えたい欲望が湧いてきて、しまったなと感じた。ちくまの水木しげるとつげ義春はコンプリートしたい。あと白泉社の大島弓子。この辺の文庫も品切れていたりするのだろうか。

ついで小説。安部公房と夏目漱石は新潮文庫版はだいぶ揃えていたと思ったが全然足りてなかった上、二十年以上前に買ったものが多く、だいぶ劣化している。これも困ったことに、「買い直して揃えたい」という欲望が出てきた。あんまり整頓しない方がいいのかな。しかし並べ直しているとこれはもう手放してもいいなという本も出てくるので最後までやってみよう。

労働の忙しさにかまけている上、書店に寄る習慣もなくなってしまったため、新刊の情報に疎くなってしまっている。思い出したときに、筑摩書房や河出書房新社、晶文社、みず書房などのサイトは覗いているが、あれもこれも買いそびれて読まずにいたままだと思うとなかなか寂しい。しかも労働の最中は全くそうした本の内容は必要とされておらず、日々のタスクに追われるばかり

なので、ますます新しい本から離れていってしまったという気分になる。今後は初版数千部刷った後はそのまま品切れてしまう本も多くなるような状況だと感じており、欲しいと思った本はすぐ買わないといけないような焦る気持ちがあつてそわそわしてしまう。

六月某日

仕事を終えくさくさした気分でこりや海でも見ないと気分が沈み込んでしまうと思ひ、今は誰も住んでいない母方の実家の方へ向かった。三角町郡浦（みずみまちこうのうら）という小さな漁村。実家の隣には母の兄が住んでいた家があり、そこに車を停めた。家の一階は剣道の道場になっている。今も誰かが剣道の練習で使っているらしくきれいに手入れされていた。

実家の方をのぞいて見たが、基礎は百年以上昔のものらしくかなり痛んでいた。畳の上にはネズミの糞が散乱し、裏にあった畑は草木で覆われていて踏み込む余地もなかった。今は従兄弟が相続しているはずだがなかなか手入れが大変そうだ。坂の上の家屋から5分くらい降りていくともう海に着く。泳げるようなところもないし、青々として透き通ったような海でもないが自分にとつては心落ち着く景色で、いくら気分が良くなった。

## 存在しない本の二と

ムラカミヒロミ(フライング・ブックマン)

柳生武芸帳とかやまどり文庫とか、或いは崎陽年々録とか死霊宝鑑とか、物語の中にしか出てこない書物が世の中には相当数ある。

よく知られたものでは、芥川龍之介の「奉教人の死」や「きりしとほろ上人伝」に引用される「切支丹版れげんだ・おうれあ」であろうか。

「れげんだ・おうれあ」自体は実在する。十三世紀のジェノヴァの大司教ヤコブス・デ・ウオラギネがラテン語で記したキリスト教聖人伝の決定版である。芥川は、この本を傍らに、前述の作品を書いた。

「奉教人」は、「聖女マリナ」の項を、「きりしとほろ」は「聖クリストポルス」の項を参照している。後者は、英語で聖クリストファー。幼児を背負って川を渡る姿は、多くの名画の題材になっている。

切支丹版は安土桃山期に、長崎、天草などで、イエズス会士が布教、教育目的で印行した活版印刷によるローマ字本で、「伊曾保物語」「日葡辞書」「どちりな・きりした

ん」等多数伝わっているが、「れげんだ・おうれあ」は存在していない。

小栗虫太郎の『黒死館殺人事件』は、ミステリ界の三大奇書のひとつで、読むに手強く、読了しても理解できず、その上、玩具箱か塵芥箱を取っ散らかしたようなペダントリーのつるべ撃ちと来ていて、如何様困った本である。その中で、さも常識だろう、と言わんばかりに主人公の口から語られるのが、『ウイチグス呪法典』である。

法王シルヴェステルⅡ世の十三使徒の一人で、ローマ教会に盾つき、他の使徒は刑死したが、彼のみ逃れて大技巧呪術書を完成した、と説明されている。法王は学究肌でギリシャ・ローマ・アラビアの学問を積極的に学び、教育者として多くの弟子を育てた。十三使徒は史実だが、ウイチグスなる人物は確認されていない。法王自身、魔術に纏わる伝説が多いことから、この部分を別人格として独立させたのではないかと思う。

かつて、澁澤龍彦は『黒死館』の注釈を作る誘惑に駆られたが、虚実緋い交ぜの内容に匙を投げたという。その注釈書が二十一世紀に入って、漸く実現した。(二〇一七年、山口雄也註・校異・解説) この中でも、ウイチグスについては注釈がない。

都筑道夫は、作中に時々「朱羅紀」という同人誌を登場させたり、東見本を模した造本で読者を煙に巻いたり、本を上手く使った作品が少なくない。

例えば「阿蘭陀すてれん」は、この奇妙な表題を持つ本が主役の物語である。主人公が、作家仲間から、この本を借り受ける。自費出版本らしいが、その筆力の強さに驚き、読み進めるが、ある所から先に進めなくなる。そして、夜中に持主の作家がやって来て、強引に本を奪っていく。一体、この本の正体は……というモダン・ホラーである。

川又千秋の『幻詩狩り』は、S.F. アンドレ・ブルトンに託された、若い東洋系の詩人の草稿が、紆余曲折あって日本に齎されるが、シュルレアリスム系の出版社で翻訳に取り掛かるや、訳者や校正に当たった編集部員の上に次々と変事が出来る。

本は無事出版されるも、今度は、書評家やそれを購入した客の間にも……というもの。

ブルトンやデュシャンやゴークーやアルトーや、實在、非在の人物が入り乱れ、二十世紀超現実主義の歴史をなぞりながら、物語は展開していく。このジャンルが好きな人間には堪えられない作品である。

昭和五十年代初頭、清原なつこの登場は画期的であった。乙女ちつくロマコメ全盛の少女誌の中に、いきなり、恋愛無用、本だけが友という変人女子学生が闖入したのだ。題名も「花岡ちゃんの夏休み」。

その花岡ちゃんが、書店で、男子学生と争奪するのが『ロバート・ブラウン物語』。人を食った題名だが、酒など飲んだことがない少女読者たちは、随分、この本を探し求めたらしい。確かに、實在のリアリティは兎も角、読んでみたい、という気にさせる説得力はあった。

つらつら思うに、架空の本を捏造する場合、何より題名に意を払うべきで、変に捏ね繰り回した、凝りに凝った題名などは止めたがよい。胡散臭いだけである。「日記」「手記」等、ごくごくありふれたものにするか、さもなければ實在する題名を一寸捻るくらいが丁度いい。「妖魅本草録」とか「信濃秘志」といった類いだ。

もつともらしく装うために文章を引用する向きもあるが、これも余程自信のある場合を除いて避けたがよい。忽ち馬脚が現れる。

# 鳥取あれこれ その五十九

内田 克彦

(地域研究者)

橋浦一〇人兄弟のそれぞれの生涯を調べることは、日本の近代史を学ぶことになる。橋浦泰雄については、二〇〇〇年刊行の鶴見太郎著『橋浦泰雄伝』がある。橋浦時雄については、自身が日記を書いており、10号から19号までの、記述量としては三分の一近くが抄録された『橋浦時雄日記第一巻 冬の時代 一九〇八―一九一八』が雁思社から一九八三年に刊行されているが、続巻は出されておらず、また、評伝も刊行されていない。

21号から36号までの日記原本(20号は押収され失われている)が鳥取市やまびこ館の『館藏品選集I』(二〇〇八年刊)で紹介されているが、現在は、それ以前の号も所蔵しているらしい。そこに参考文献として、『月刊社会党』に掲載された鈴木徹三論文が挙がっており、検索すると、『月刊社会党』には橋浦時雄関係でさらに三つの論文が掲載されていることがわかった。鈴木徹三が父親のことを調べた『鈴木茂三郎(戦前編)』も一九八二年に刊行されて

いた。同著の「あとがき」には、次の記述がある。

生の資料としては、ごく少数の人を除いて、長年世に埋もれてきた『労農』同人橋浦時雄氏の六十余年にわたる日記、同氏所蔵の堺利彦、山川、荒畑ら二〇〇通以上の書簡、葉書類を閲覧できたことが最大の収穫であった。この「あとがき」を書いてるとき、みずす書房から『橋浦時雄日記』(仮称)を出版することが内定した。思わぬ副産物となった。

因みに、鈴木徹三「創立期の日本社会党と『橋浦時雄日記』」(一九八五年355号)には、次の記述がある。

所蔵者の依頼により、みずす書房から出版することになり、松尾(尊允)京大教授が主として編集にあたり、私がお手伝いすることが決定していた。その顛末を記すのは不愉快だから省略するが、私どもが知らないうちに雁思社(風媒社販売)より「略」刊行された。「略」もつとも、雁思社にはなんら罪はない。ご承知のような出版状況のもとにおいて、この種の硬い書物にいどんでいることを高く評価すべきであろう。

真相はよくわからないが、続けて第二巻と書簡類などを収録する第三巻が計画されていた。

当時、『日記』等は、橋浦の妻ヒロの甥である、豊橋の乗運寺の佐藤清賢住職のもとに保管されていた。鈴木正著『戦後精神の探訪』に、次の記述がある。

着いたら既に先客がいた。それが栗木〔安延〕さんだった。この寺には昔の因縁で橋浦時雄日記をはじめ、堺利彦や有島武郎らの遺品、そして明治末から大正時代にかけてのさまざまな揺籃期の社会主義運動資料が一堂に整理保存されていた。たしか橋浦時雄文庫という看板が部屋の入りにかかっていたような気がする。その部屋で栗木さんは中野区史の編纂にたずさわっていた仕事の一環として戦前の消費組合（いまの生協）関係の資料を丹念に調べていた。

『中野区史 昭和篇一』では、「中野共働社」関連で『橋浦泰雄談』が載っており、時雄は羅列された名前の中に出てくるにすぎないが、戦後を扱った『中野区史 昭和篇二』では、「中野の消費生活協同組合」の項の記述のかなり部分で『日記』を参考としている。また、『岩波講座日本歴

史22』（一九七七年刊）の栗木安延著「経済危機と労働運動」論文の中でも、注欄に「橋浦時雄日記（未定）」と表記して引用している。

さて、平林たい子著『自伝的交友録』（『全集10』所収）の中の「鈴木茂三郎さんと私」の項に次の記述がある。

今は私も絶交しているその友達に仮にA子という名前をつけておこう。彼女の夫は、鈴木さんなどと一緒に革新運動にたずさわって来た古い同志の一人であった。彼女は、夫君と相当年齢がちがうためもあって、有閑的だった。「略」そのうちに彼女の熱は、大森〔義太郎〕さんから鈴木茂三郎さんに移った。毎日のように鈴木さんの讚美を聞かされて、私も無邪気に相槌をうっていた。「略」あとで彼〔夫君のこと〕が政治運動をやめる気になったのは、A子さんと鈴木さんとの関係に対することだわりだと人に聞いてびっくりした。A子さんは、鈴木さんが恰も彼女を誘ったかの如く、夫に言っていたにちがいない。

前掲『鈴木茂三郎（戦前編）』で、A子は『労農』同人橋浦時雄のヒロ夫人だと、種明かしをしている。

（以下、続く）

二〇二一・六・二七

## 不条理のメルヒェン Ⅲ 「裸の王様」の音楽

武中 淳彦

(楽人)

No.1「手品」 ベースの上行半音階に、ミステリアスで

眩ぎのような旋律…これは後にサククス他が頻繁に繰り返す「不思議の」モティーフともなる。

No.3 (パート12) 「王様はどこ？」 「王様を探す家臣達の「いつでも衣装部屋…」と結ばれる賑やかな合唱、華やかな王宮の日常を描く。

No.4 「人は見かけに」 着替え乍ら王様の歌う鼻歌

唯物論を高らかに唱え：「だからいつでも見かけが肝心！」と計り、バツサリと云い切る…

初め凡庸な二拍子だったものが(渋さの)玉井さん曰く「最近、王様はご機嫌に三拍子で謡ってらっしゃる…」の一言で現行の三拍子版になり更に調子良く新たな前奏も付いた、コントラバスの響きに乗って。

No.5 「喪服の歌」喪服の専門家フリルフリルがモフク、モフークナー…と歌う寺山の巧みな言葉のリズムに乗ったファンキーソングに。やがて「悪魔も羨む此のデザイン！」

と讃えられ踊られるゴキゲンなナンバーへと変容して行く元々はタンゴとして書かれてゐたと云う「素性の怪しさ」こそ地獄の淵を巡る此の曲らしい…

No.6 「葬送行進曲」ショパン？ ちやいます、粗悪品のバツタもんでんがな。皿洗いアツパツパの愛猫への鎮魂曲…と言う訳でワルツイングキャットもLアンダーソンの名曲みたいな上等なものではございません…

No.7 「アップリケの歌」元はシチリアーナ風のカンツォネッタとして書かれたシンプルな歌。演出の要望でもう少し邪悪でアラビア風のエキゾティックな装いに。怪しげなチプシーの $\text{♩}$ が即興で絡む。最近幾つかのカバー曲で面目躍如、歌唱力に定評のある役者大川潤子さんの歌声を想定、半音階や東洋旋法を散りばめ、「ロックミュージカルみたい」なノリで「王様はガウンを1000枚持つてる」とアイロニーたつぷりに歌いあげ、シャウトする。

No.8 「バカで間抜け…」人の良い王様を誑かす「調子に乗った2人の詐欺師達によるあつけらかなコミックソング」ワルツ風に結ばれる。

No.9 「ちんからとんとん」機織りの作業歌。オリジナルはごく簡素な、以前「小鳥の学校」で演じられた際子どもたちに歌われていた小唄。延々と歌われていく内徐々に様々な要素の入り混じった怪し気なものへ膨張してゆく…♪

チンカラトントン ハタリコン…

No.10 「でんでん虫」(存知小学唱歌を寺山は「王様が居ないと大変だ」と囃す遽しい歌に作り替えている(9.10、二つのナンバーはアレンジもの)

No.11 「ホックのラメント」…なぜなんだろう？内省的でナイーブなホックは自問自答し哲学する…物語から派生しやがて、人は何故歌い、聞くの？と普遍的な問いになり不条理な世の中を嘆く本質を衝く哀歌に…このテーマも後に転じてスピーディーなジャズアイテムに…。No.7と対を成す重要な歌。

No.12 「ぶつうの人の」 利口な世渡り上手、豚飼いアロハの自慢話、シユクシユクドン…と調子良くオノマトペをスピーディーな3拍子、5拍子に載せて歌う、唯一若い恋人達の曲、途中から婚約者のプリンセスも手に手を取って朗らかに歌う、二重唱版。

No.14 「オオさまはハダカだ…」喧騒のラストシーン、大挙した民衆に依って高らかに謳われるメインテーマ。トラム・ペット等ブラスの伴奏に乗って…大団円を彩るプロパガンダ「ゲラゲラ、アツハツハ クスクスチョン」

No.15. 「ガーベラの騎士のワルツ」、Rシユトラウス「薔薇の騎士」へのオマージュは勿論、**W**が調子こいている…見えない衣装のゴージャスさ、優雅さを披露する為のワル

ツは他の楽器と渾然一体となりやがて本性を表し胡散臭さマックスに…

2021.06.06.

※鳥の劇場GW公演「裸の王様」(寺山修司台本、中島諒人演出)公演の、有料配信いよいよ始まりました。詳しくは鳥の劇場 0857-84-3268

ウェブ/[www.birdtheatre.org](http://www.birdtheatre.org) 迄

「今回の一曲」

R. シユトラウス 楽劇「薔薇の騎士」

① R. ヘーガー指揮(短縮版) L.レーマン, R.マイヤー, M.オルセフスカ, E.シューマン、W.エフィルハーモニカー & 国立歌劇場合唱団他 1933年、9月ヴィーン、コンツェルトハウス中ホール録音

② E.クライバー指揮 W.エフィルハーモニカー & 国立歌劇場合唱団 M.ライニング, L.ヴェーバー, A.ペル, S.ユーリナツチ, H.ギュデン他 1954年6月ヴィーン楽友協会大ホール録音

③ G.セル指揮 W.エフィルハーモニカー & 国立歌劇場合唱団 M.ライニング, H.ギュデン, J.ノヴォトウナ, プロハスカ他サルツブルク音楽祭 1949年ライヴ, サルツブルク祝祭劇場

# いま私が恋しいもの

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

コロナで一年経った。

「コロナ以前の生活」とは、私にとつて即ち「東京での生活」だし、「教員になる前の生活」であつて、果たして自分の中に巻き起こる「恋しさ」なるものが、「東京」なのか、「教員でない」生活なのか、「コロナ以前」の社会なのか、はつきりしないものがある。

遠くに行くのが好きだった。遠くにとりあえず行くこうとしてしまつて、鳥取に来てしまつたくらいだし。

空港や、新幹線のホームが好きだった遠くに行ける。今の生活のこをととりあえず捨てて、遠くに。旅に出る前の高揚感は独特だ。移動している間は特に道を選ぶことも考えなくていいから、旅の中では一番楽ができて、色々な想像もかき立てられる部分だと思ふ。日常の風景を置いていつて、どんどん進んでいく。「ここでないどこかに行けば」、何かが変わるかもしれないから。

教員になつてから、よく振り返るのは自分の中高時代だ。私は不満だった。「ここでないどこかに行けば」全てが変わると信じていた。そんなことだけを覚えている。

グループで活動をすることが多い今の勤務校と、典型的な講義型で進んでいた自分の出身校を振り返ると、静けさは全く違う。私の中高時代は、徹底して沈黙を求められた。ある年の運動会の開会式、突然雨が降つても、誰も何も言わなかった。そんな学校だった。当時の私にとつて、母校はいつか出ていく巣だったからこそ、授業中窓の外を見て、私は「ここでないどこかに行けば」変わると信じていた。その時に私の人生は始まるはずだと。

でも、「ここでないどこかに行けば」変わるものなんて、ほんのわずかだ。本来の私は、家でダラダラ過ごすのが好きだし、ひとに誘われれば出かけるけれど、自分で人を誘うのは苦手で、近所の店にいきなり一人で入るのは億劫だったりする。劇的でもない人生を積み重ねている。

この三ヶ月楽しみにしていたテレビドラマが終わった。『大豆田とわ子と三人の元夫』で、坂元裕二・脚本、松たか子・主演のドラマで、ヒロインと彼女と離婚した三

人の元夫が繰り広げるラブコメディである。

同じ脚本家による映画『花束みたいな恋をした』についても書いたが、その映画よりも贅沢な東京である。ヒロインは雇われ社長で、離婚は繰り返しているが、会社や家のあたりは表参道や渋谷などを思わせ、生活は豊かなように見える。

ドラマは母親の納骨から始まる。だが、母親がどう亡くなったかなどは描かれない。夫たちとの馴れ初めも語られていくが、実際にどう別れてしまったか、劇的なシーンは描かれず、触れられたとしても簡単に触れられるだけである。そして、会社の危機と共に訪れる親友の死も、結局死因も語られぬまま終わる。何が起きたのか、徹底的に画面の映像からは排除されてしまっているのだ。ある人はこの作品を雑談ドラマと言い、ある人は後片付けを描いたドラマだという。

人生はほとんど雑談だ。とるに足りない言葉ばかりだ。でも、それを物語にすると、多くの作り手は雑談を消してしまふ。とるに足りない会話ではなく、「舞台上のものは全て使い尽くせ」とでもいうように、劇的に描くのが多くの商業作品だ。

私が中高時代に感じていた「ここでないどこかに行けば」という焦燥感は、自分が物語の外側にいる危機感からくるものだった。

女子校だから、漫画や映画のような青春時代の要素は徹底的に排除された。とにもかくにも、沈黙、そして勉強に励めと。そうすれば、「ここでないどこか」に行った時にきつと役立つのだから、そこまで待てばいいと言われていたように感じていた。

だが、人生など、物語の外側にいるように思ってしまう時間の方がほとんどだ。悲しくても日は登る。何も起きなくともお腹は空く。楽しくても他の時間と同じように一瞬で過ぎていく。眺めていた窓の風景だけは一生忘れない。「ここでないどこか」に行かなくとも、生まれついた瞬間に人生は始まっている。そこから動くか動かないかは、結局自分自身だし、そう気張らなくとも、とるに足りない言葉と共に人生は回っていく。

それでも、「あなたも物語を生きているよ」と教えてくれたドラマのことは、恋しくて仕方ない。



## あきの素生

(くうねるめがね)

噂とは恐ろしいものだ。でも、単に自分が間違えて覚えていただけかもしれない。となると、恐ろしいのは嘘か本当か確認もせず、それに基づいて一時期きゅうりを控えることまでしていた自分ということになる。きゅうりのことを考えて、こんなに己を省みることになるうとは。

その外れで反省すべき「きゅうり控え」は、長続きしなかった。きゅうりがなければ始まらない、という好物があるからだ。

まず、ポテトサラダとマカロニサラダ。ほぼ同じ材料で作っていて、違いはじゃがいもとマカロニくらいなもののだが。水にさらしてみじん切りにした玉ねぎをほんの少しと、油を切ったツナ、粗みじんにしたゆで卵。きゅうりは薄くスライスし、軽く塩もみして水気を絞る。それらと、ふかした芋か茹でたマカロニ、マヨネーズ、黒こしょう(たまにレモン汁や醤油少々)を混ぜて、冷蔵庫で少し冷やす。私の作るこのサラダでは、きゅうりは歯ごたえを担う大事な存在だ。塩もみしているから、味を引き締めてくれるし。それから、ハムときゅうりのサンドイッチ。片方のパンにマヨネーズ、もう片方にバターを塗って、ハムと、塩をして少し置き、水気を取ったきゅうりをはさむ。きゅうりは、サラダのときより厚め。斜め切りにする。丁寧で作

きゅうりは世界一栄養の少ない野菜としてギネスブックに登録されている、という噂を今7日まで鵜呑みにしていた。料理をするのはわりあい好きなのだが、手早い方ではない。短時間に品数を作るようなことは不得手だ。そのぶん効率よく栄養が取りたくて、「栄養価の低いきゅうり」を避けていた時期すらある。優先度を下げていたというべきか。それが、実際には“Least Calorific Fruit”として認定されているというではないか。直訳すれば、カロリーが最も少ない果物。栄養というより、カロリー。野菜でなくて、果物。ギネス世界記録の公式サイトで確認したので、これは間違いないだろう。いや、確認した記事は二〇一六年のものなので、今ではもっと“Least Calorific”な果物が確認されている可能性がないとはいえない。ちなみに同サイトによれば、“Highest Calorific Fruit”はアボカドのようだ(いつ時点の記録なのかは不明)。

るときは、重ねたサンドイッチに濡れ布巾をかけ、お皿をおもしにして、パンと具材をなじませたりもする。家でサンドイッチを作るときは、もっぱらこれだ。シンプルで、いくつでも食べられる。

これからの季節お世話になる冷麵にも、きゅうりは欠かせない。ピリ辛の冷麵にトッピングするのは、ゆで卵、トマト、甘酢に漬けたきゅうり。キムチとチャーシューがあればいうことなすが、必ず入れたいのは先に挙げた三つ。辛いのが得意ではないのに辛くない冷麵は何だかさみしい。そんなわがままの味方だ。辛みを一番和らげてくれるのはゆで卵。きゅうりは、甘みで口の中をほっとさせつつ、酸味で刺す。これがないと、抜けたような味になる。自分で勝手に始めておいてなんだが、きゅうりを控えるなんて、土台無理な話だ。

最も憧れるきゅうりの食べ方、がある。強い日差しの下、川や井戸の水で冷やしたきゅうりに、塩を付けてかぶりつく。このシチュエーションに感じるなつかしさは、小さい頃観たアニメ映画から来るものなのか、実際の体験によるものなのか、判然としない。あるいは、その両方かもしれない。ああいうの、いいなあと想像しながら、家の中できゅうだい揃ってきゅうりを丸かじりしていたのは、間違いの

ない記憶だ。親せきからたくさんきゅうりをもらったときは、前世は河童かというくらいにかじっていた。きゅうりに酔っぱらっていたと言ってもいい。水分たっぷりのきゅうりに塩、を、暑い時期に摂るのは理に適っているのだろうけれども、それ以上に、こここない好ましい場所に連れて行ってくれるような気がして、きゅうりをかじっていたのではないかと思う。

水面に反射する光、濃い陰。眩しきで色褪せたあぜ道、川までつながる踏まれた草の道。水着の子ども。夏が来るなあ。

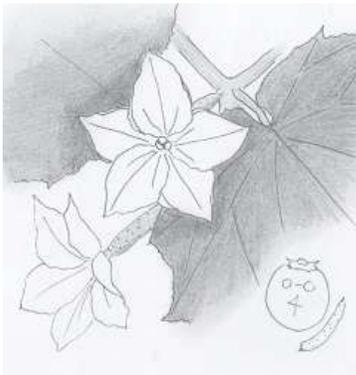


イラスト あきの素生

## 猫と断捨離



### ドラマリア

(座敷わらし)

人生何度目かの断捨離中だ。

きっかけは合宿明け当日。わたしの不在中にハンストをして衰弱した猫を自宅に連れ帰ったときに事件は起こった。部屋の隅に立つ二メートルの本棚の背後に猫が落ち込んだのだ。

隣に並ぶ重量感たっぷりの洋服箆笥は抽斗を抜いてもびくともせず、救出に入る隙間はない。合宿明け当日にこんなことをして大丈夫か。ちらりと脳裏に不安がよぎったが、他に選択肢は思いつかなかった。さらに隣の三段ボックスに足をかけて、洋服箆笥の天辺にやつとの思いで上がり、腹ばいになって本棚を覗き込む。だが、ここからが本当の危機だった。暗い隙間を覗き込むために本棚を傾けたとき、混乱した猫が底面に潜り込んでしまったのだ。

もはや身動きの取れない、まさに絶体絶命だった。手を離せば、傾けた本棚は元に戻る。逃げる隙間のない場所で弱った猫は押し潰される。助けを呼ぼうにもスマホは離れた床の上(後で気づいたが、たとえ誰か呼んでも玄関を開

けられなかっただろう)。ならば、もう倒してしまおうしかない。そしてそのためには、この体勢のまま本棚の中身を取り除いて軽くするしかない――

わたしの中にダンシヤリガミが降臨したのはこの瞬間だった。何度も読み返した海外ミステリ、仕事関連の資料、愛する作家のサイン本。痛む心に蓋をして、ばさりばさりと片手で払い落とした。その後、なんとか無事救出した猫を抱き上げて、無造作に積みあがった本の山を見下ろしながら、この山の半分以上は手放しても惜しくないものだな、と思った。

あれから、ダンシヤリガミはまだわたしの中にいる。



・編集後記:

ふたたび、アップルパイ。「陽まるアップルパイ」にはもう会えませんでした。同じくローソコの冷凍アップルパイもなかなかのAP具合でした。りんご! ドラメラリア(編集長) 六月の定有堂教室「読む会」テキストは『人新世の「資本論」』でした。Think bigという立場の斎藤幸平さんと「地べた」というブレイディみかこさんの対比で考えました。「コミュニケーションとアナキズム。結論はでません。 奈良敏行(発行人)